

古典指導のヒント

身近な事柄に引き付けて

瀧康秀

—漢文指導のヒント—

漢字ばかりで書かれている外国の古典を、アクロバティックに戻ったりしながら、慣れない古風な日本語に変換して読んでいく……漢文の授業には確かにそういうとっつきにくさがある。それはそうである。教材によっては、二千数百年前の、紀元前に遡る古代文明の産物であったりするのだから。

漢字は時代によって書体も意味もさまざまに変化しているし、漢文も、古代・中世・近世と、その文体を変えつつ今に至っている。古代になればなるほど、漢語も文体もシンプルだったのであり、だからこそ、早くからさまざまな注釈が生まれ、それ自体が学問の中心になってきたほどである。漢文と格闘して私も三十

年以上になるが、今でも漢文読解の難しさに直面してばかりである。

しかしながら、私は漢文学習の最初に、生徒とのやりとりの中で、いつも次のようなことを言っている。

「有名な四つの古代文明の文字で、今日まで生きながらえて使用されているのは、漢字しかないんだ。これは世界的に見ても、特別なことだとわかるだろう?」

『「論語」の「学而時習之、不亦説乎?」
「学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや」などは、高校はもちろん、中学の教科書にも出ているが、この「学而時習之 不亦説乎」という字句は、実に紀元前から変わっていない。キリスト誕生以前から変わらずに伝えられた字句を、日

本の中・高生は学べている!」

「それに、ほら朋美さん(仮名)。あなたの名前の「朋」は、『論語』の、さっき言った「学而……」の後に出てくる「有朋自遠方来、(朋の遠方自り来たる有り)」の「朋」だよ! 意味も同じだ。

君たちが自覚してないだけで、私たちの今日の生活・文化の中に、漢語・漢文が育んできたものがたくさんあるからこそ、こういう発見がいくらもできる。だから君たちは、世界的に見ても稀な、この特別な学習環境を生かさない手はない!」

日常、漢字と触れ合っている日本の中・高生は、今なお世界の中でも漢文と特別な近さにある。自分たちの文化の背景を知るためにも漢文は読まなくてはならない、とさえいえるほどだ。入門期の生徒には、漢文の、こういった身近さという側面をまず強調し、親しみやすい点の多くあることに気付かせていきたい。

とっつきやすさ、親しみやすさを感じさせる糸口としては、先の名前の例もその一つだが、今日の我々の文化とも関連し、身近にあるからこそ普段それと意識しにくい、漢字・漢語・漢文に関係する事柄に注目させるのも有効である。

『史記』「鴻門之会」「四面楚歌」は、教科書において不動の地位にある教材である。緊迫した人間関係が交錯して実にドラマチックな展開であり、簡潔で要を得た文体は読みやすく、学習に資する語法・句法も少なくない。時代背景も、秦末漢帝国成立前夜という、東アジア史のみならず、世界史上も極めて重要である。漢文学習には欠かすことのできない作品と言える。これを例に取ろう。

まず、「鴻門之会」に至る経緯について、リード文（解説文）を読み合わせるなどして触れておくべきだが、ここでは、世界史で必ず学ぶ始皇帝の統一事業のうち、文字について確認しておくことよい。各地でさまざまな書体が使われていたのを、始皇帝は篆書に統一した。この篆書は、日本の公的文書で今なお欠かせない印鑑の書体、印篆の元となったが、生徒の多くにはその認識がないので、知らせておきたい。二千年以上前の大業のささやかな余波は、こんな身近な所にまで及んでいたのだ、と。

さて「鴻門之会」では、(一)「沛公(略)謝曰……」、(二)「噲拜謝起……」、(三)「張良入謝曰……」と「謝」字が複数回用いられているが、その箇所を機に、

漢文中において一字で表現された語について、今日我々が用いる二字熟語に置き換えさせ、その意味を特定させるようにするとよい。古代に遡るほど漢語表現はシンプルであり、一字・一音・一単語で用いられることが多かった。時代が下るにつれ、「謝」ならその字義の中の三つ、ア「あやまる」、イ「礼を言う」、ウ「断る」を、それぞれ「謝罪」「感謝」「謝絶」などの熟語で表現し、意味をわかりやすく伝えるようになったのである。

※注(一)(三)がア、(二)はイの意味である。

もちろん、現在日本語となっている熟語と漢文中の熟語とは意味が微妙に異なる場合もあるが、漢和辞典で確認させつつ一字の語を身近な二字熟語に置き換えさせていく練習は、漢文学習において生徒の理解を大いに助ける。多くの漢文指導者が実践しているやり方である。「鴻門之会」では、ほかに(一)「厄酒安辞足」、(二)「今者出未辞也」、(三)「大礼不辞小讓」、(四)「何辞為」、(五)「不能辞」と、「辞」も頻用される。この字も多義であり、ア「断る・やめる」、イ「気にかける」、ウ「別れを告げる」などの意味があり、アでは「固辞・

辞任」、ウでは「辞去」などの熟語が思い浮かぶ。身近な熟語に置き換えられる場合は、ぜひ生徒に発見させたい。

※注(一)がア、(二)(四)(五)がウ、(三)がイである。

ちなみに、「鴻門之会」の段階では「沛公」と称された劉邦であるが、「四面楚歌」において項羽軍を取り巻くのは、劉邦の指揮する「漢軍」である。つまり劉邦は漢王になっている。沛公は、項羽に与えられた狭隘な盆地に過ぎなかった漢中に拠点を置き、漢王と称したのである。後に項羽の楚を破り、天下を平定した漢王・劉邦は、新帝国の国号をそのまま漢とした。短命に終わった秦と異なり、この漢帝国が前・後四百年に亘って存在したため、漢こそ、二〇世紀初頭にまで至る中国諸帝国の基本形を築いたといえる。だからこそ、我々が使う字は「漢」字なのである。従って、「鴻門で沛公が項羽に切られ、項羽の楚が磐石の帝国となっていたら、漢字は、なんと楚字と呼ばれたかもしれないよ。」と、私は歴史の「もしも」を生徒に語ったりする。これも、漢文を少しでも身近に感じてもらうための方便である。

(たきやすひで・清泉女学院中学高等学校)